

ミクロネシア連邦・グアムにおける研修を通して

農学研究科 生物生産学専攻 修士1年 小森健太

1. はじめに

今回、太平洋島嶼学特論の講義でミクロネシア連邦チューク州およびグアムを研修として訪れた。本講義の目的は、「生存基盤の再確認」および「真の国際人育成」であるが、今回の研修では、エコシステムが簡略化された海外の島々や国際的な視野の獲得、コミュニケーション能力の向上、海外の植物の生態系の観察などを自分の中での課題として本研修に臨んだ。ここでは、本研修で学んだことや感じたことを述べたいと思う。

2. 研修の概要

8日間の海外研修は、以下の日程で行った。

- ・ 1 日目 9月4日 移動（福岡→グアム→チューク州、飛行機）、研修ミーティング
- ・ 2 日目 9月5日 移動（ウェノ島→ピス島、ボート）、ピス島全体の見学
- ・ 3 日目 9月6日 ピス島での食物調理の実践・調査
- ・ 4 日目 9月7日 移動（ピス島→ウェノ島、ボート）、農林水産省の見学、ウェノ島全体の見学
- ・ 5 日目 9月8日 移動（ウェノ島→グアム、飛行機）、グアムの市場調査
- ・ 6 日目 9月9日 チャモロ文化村での体験 グアム大学による講義（イノウエ スミス ユキコ先生）
- ・ 7 日目 9月10日 グアムの人々の生活やそのあり方の実践・調査
- ・ 8 日目 9月11日 移動（グアム→福岡、飛行機）

3. ミクロネシア連邦チューク州

3-1 ウェノ島

ミクロネシア連邦はフィリピンの東に浮かぶ島々であり、チューク州、ポンペイ州、コスラエ州、ヤップ州の4州から構成されており、今回訪れたのはチューク州ウェノ島である。そこは交通の基点となるチューク国際空港が立地しており、多くの人々や出店などが目についた。また、偶然ではあるが今回は同じ日程に自分らを含めて30人前後の日本人がいたことに驚かされた。彼らと多少話す機会があったのだが、彼らの多くはダイビングやシュノーケリングで来ているらしい。このことからチューク州での観光業が盛んになってきていることを実感した。しかしホテルまでの道中において、道が整備されているところとされていないところがはっきり分かれており、ほとんどが整備されていなかった。また、道路は水はげが悪くて所どころ冠水状態が目立ったことから、インフラの整備がしっかり

出来ていないことを感じた。しかし、これには所有者の許可がなければ工事が出来ず、すべての人が道路整備に賛成していないという原因が存在するようだ。

また生活としてはスーパーで売られているもののほとんどが輸入物で日本製品も数多く販売されていた。個人店では魚や野菜、果物などが並んでいてにぎわっていた。しかし、よく道を見てみると、多くのごみが落ちていた。それは、彼らの風習が原因で、出たごみは自然に還るものであると思っているからだ。しかし最近では、JICA の協力により各地にごみ箱が設置され、以前よりマシになってきているそうだが、今後観光地として動くのであれば、島の人々一人一人が意識してごみへの意識を変えていかなければならないと思う。

3-2 ピス島と周辺の島々

ピス島はウェノ島からボートで 1 時間弱かけて移動したところにある人口 300 人ほどの比較的小さな島である。そこで現地の方々と 2 泊 3 日の間、生活を共にすることで、暮らしや文化を学ぶことができた。ピス島には多くの果実（バナナ、パパイヤ、パンノキ、ココヤシなど）や食用用のイヌやブタを多少飼っており、網漁や素潜りで海の幸（魚や貝類など）をメインに生活していた。しかしピス島にはお店というものが存在しないので、ウェノ島などからお米や調味料、衣服などを購入して定期的に持ち込む必要がある。そのためボートで毎回ウェノ島に行かないといけないのだが、波が荒れていても関係なくいく必要があるので、相当な技術が必要であると思った。また島の人々にはそれぞれ役割があるので、相当運転できる人も限られているようだ。また、日本のようにエネルギー資源および水供給施設などが整っていなかった。ガスボンベの使用やジェネレータでの発電を行い、水の供給施設は汲み取り式の井戸を作り、飲み水用のタンクを置くことで雨水を用いて生活していた。なので、もししばらく雨が降らないと政府から水を配布しに来ることもあるようだ。こういった生活を体験して、まず思ったのが日本では考えられない、楽しみはなんだろう、と凄く疑問に思わされたり、驚かされた。しかしながら彼らの顔には常に笑顔が絶えなかったことが凄く印象的であった。また島内にはビンロウの文化が浸透しており、嗜好品として人気があり、嗜む場面が多くみられた。

ピス島にも自分の研究テーマであるトウガラシが存在していた。沖縄や奄美大島などで用命な島トウガラシのように小さめのサイズのトウガラシであった。味もそこまで辛くなく、あっさりとした味だったと思う。面白かったのが、やはり小さな島ということもあって調味料が少ないせいか、料理自体の味が薄く感じた。そこで食事の際に置いてあったのがトウガラシをつけた液体である。それはココナツの汁を少し発酵して甘くさせ、酢酸が少し混じった状態のものにトウガラシを漬けて少し辛くさせたものであった。こういった現地ならではのトウガラシの使い方はこういう研修だからこそ学べるものだったと思うし、自分が今行っているトウガラシの商品開発のアイディアに繋がる 1 つに成り得ると思った。

またピス島から 30 分ほど船で移動したところにある無人島で、ヤシガニ採集やシュノーケリングによる貝採集を体験した。自分たちの食べるために必要な食べ物を実際に取り

に行くという初めての体験をすることが出来た。初めてのサバイバルの時間は今後の人生でとても役に立つものになると思われる。

4. グアム

グアムは太平洋にあるマリアナ諸島南端の島であり、日本をはじめ、世界中から観光客が訪れ、観光業が経済面での大きな支えとなっている。グアムではレンタカーを借りて島の半分を周り、島の雰囲気や生活を見て回っただけでなくチャモロヴィレッジおよびグアム大学を訪れた。チャモロヴィレッジでは塩を作っている様子を見学することや、ハイビスカスやココナッツなど植物の葉を利用したうちわや帽子などの制作方法などを学習することが出来た。グアム大学ではイノウエ スミス ユキコ先生にお話を聞く機会を設けて頂き、グアムの現状や学生の実態、人々の価値観や生活のあり方を知ることが出来た。グアム大学では、チャモロ人の職員や学生が多だけでなく、ユキコ先生を筆頭として日本人や東南アジアの学生も数人いることを知った。また、グアムでは日本のように結婚後に専業主婦をするという考えはあまりなく、男性は日本のように料理や家事ができる女性を求めておらず共働きをしてお互いに生活を支え合うという考えが一般的であるという。自分が留学したタイでも同じ考えの人が多かったことから、日本はケータイなどのような技術だけでなく考え方もオリジナルになっていったのではと改めて価値観についても考えさせられる良い機会であったし、日本の学生同士でも大きな考えの違いに驚かされた。

またピス島からグアムに移住してきた家族との交流をする機会があった。グアムは観光地であり、日本から3時間ほどなので来やすい土地であることから、こういった機会は普通では出来ないものであると思う。また、彼らと一日共に過ごすことで、彼らの考えや生活などをリアルに自分の肌や目、耳で感じる良い機会であった。また、ピス島ではチューク語がメインであったが、グアムでは英語がメインなので彼らも流暢に英語を話せることから、自分の英語力の確認や英語圏の人々との会話の挑戦も自分にとって価値のあるものであり、今後の自分の成長に繋がるものであったと思う。それだけでなく、彼らと出来た繋がりは一生の宝になると思う。

5. おわりに

今回初めて海外の島に行ったり、島での自給自足の生活を体験したり、海外でのトウガラシの研究や使い方の勉強など、自分のためになるものばかりであった。プログラムに無かった植物防疫関連の人と先生との講談も自分の研究にとってもためになるものだし、それを含めてもなかなか出来ない体験ばかりさせて頂いたと本当に思う。また、徐々に言葉でコミュニケーションを取る以外にボディランゲージやコミュニティー内での生活習慣に従うことで適応していく方法を体験したことで色んな意味で初心に戻って考え直す良い機会でもあった。今後も様々な国の生活習慣を知り、実際に体験し国際的な視野を広げていきたいと思った。

最後になりましたが、今回この研修を組んで下さった山本先生、一緒に研修に参加したメンバー、そして研修先でお世話になった全ての方々に感謝申し上げます。